

「青年海外協力隊員が携わった世界遺産」

幅広く広報することで、世界遺産の社会性を高める

公益信託 大成建設自然・歴史環境基金事業

特定非営利活動法人（NPO 法人）

国際協力を支援する

都市計画・建築関連 OV の会

Ex-Volunteers Association for Architects

（E.V.A.A）

目 次

0	はじめに	
1	世界遺産に携わった国および建築関連隊員派遣国	1
2	モロッコ王国	
	フェズ	7
	マラケシュ	15
	メクネス	19
	エッサウイラ	23
	世界遺産と歴史的都市のかかえる問題	26
	アイトベンハッドゥ	27
3	ケニア共和国	
	ラム島	33
4	トルコ共和国	
	サフランボル	39
5	モロッコ文化省の建築隊員	44
6	携わった隊員系統図	45
7	モロッコ南部建築の施工	46
8	フェズのメディナ	47
	まとめ	

趣 旨 と 目 的

青年海外協力隊の派遣が開始されてから、今年で40年目を迎える。

これまでに派遣された隊員は2万名以上、その中で、建築、測量、環境教育など建築関連分野での職種は、600名を超え、建築関連分野でも特にその活動内容の社会性に注目したいのが、世界遺産に携わった隊員である。現在、世界遺産を持つ国は、全世界で137カ国、その数は、800件を超える。

世界遺産は、文化遺産、自然遺産、複合遺産に分類され、この内、途上国の文化遺産に携わった建築関連隊員(以後“隊員”)がおよそ30数名存在する。

そこで、本冊子では、「青年海外協力隊員が携わった世界遺産」と題し、世界遺産に直接携わった隊員の現地での活動を報告・紹介することで、世界遺産の社会性向上に寄与することを目的とした。

今日、マスコミなどによる世界遺産の報道が盛んに行われている。その一方、日本人青年が海外に出て、途上国のそれも世界遺産の現場で、他に日本人が誰もいない中、自分自身で「何ができるか」を模索し、奮闘している事実は、ほとんど紹介されない。

2年間、途上国の現場で現地スタッフとともに試行錯誤の上、成し遂げる仕事の量は決して多くはなく、地味なものである。しかし、少しずつではあるが、後世に残すべき世界遺産そのものに自らの手で、触れ、感じ、悩み、そして積み重ねてきたプロセスこそ、多くの人々に紹介されるべきだと思う。

たとえばモロッコの場合、現地道具では簡単な測量もままならず、修復計画に必要な最低限の図面も作成することも容易ではない。そこで建築隊員と測量隊員とが協働で図面を作成することもある。これは19世紀にモロッコへ入ったフランス人の活動にも類似する。彼らが植民地化した事実はよく知られているが、彼らが残した図面や地図がかなりの数にのぼることはあまり知られていない。当時の状況を知るためには、また修復事業を進めるには、こうした資料の存在が必須となる。そして隊員が活動の中で作成した「図面」と言う記録が、後世のスタッフへと伝わっていくことは、計り知れないロマンでもある。

最後に、「建築」といえば、華やかな流行を追った現代建築に関心を向ける建築家志望の若者が多い中、途上国の歴史的建造物、都市環境の保存と保護に情熱を燃やした青年たちの存在は意義深い。そして、生きた歴史的都市文化に携わってきたこの経験が、後世の建築に携わる若者たちへの糧になれば、幸いである。

内 容

本冊子では、隊員、またはそのOBが携わった世界遺産として、モロッコ、ケニア、トルコの3カ国について取り上げた。勿論、この他の国でも世界遺産に携わった隊員はいるが、今回は、帰国後の連絡先の所在、また本事業趣旨への賛同などの条件が整ったOVを対象とした。

これらのOVに対して、世界遺産に携わった活動内容や感想をそれぞれの思いで書き綴ってもらった。2～3年間の活動の中で、予算、現地習慣・風習、言葉など多くの困難に突き当たりながらも、試行錯誤とともに、それでも前へ進んでいこうとする隊員ひとりひとりの複雑な葛藤、思いが垣間見える。

また、隊員所属先が現地官庁機関のため、作成した図面や模型などは、すべて現地機関に帰属した。したがって、それらを日本へ持ち帰れる環境ではなかったが、それでも、多少帰国の土産物に混じり残っていたものを、本冊子中の挿入資料としている。

実際の現場では、歴史的建造物の保存修復にかかる計画はあるものの、予算、その他の事情で実際に進捗することは少ない。そこで隊員が出来ることは現況図などの作成である。文化遺産の現況を図面化したり、現場をひたすら歩き回り地図を作成したり、建造物を実測し図面を作成する。もともと、“建築家なしの建築”とも言われる文化遺産、図面も何もないところから始まり、図面などの資料を一から作成していかななくてはならない。ここでは隊員が現地技術者らと共に平板測量などを行い、また複雑な地形のところでは別任地の測量隊員の応援を頼み、地道に図面化していく作業が展開される。「仕事がない」とぼやく隊員も少なくはないが、今回の小冊子は、自分から仕事を見つけ、そして、行動を起こしていったタイプの隊員活動記録ともいえる。

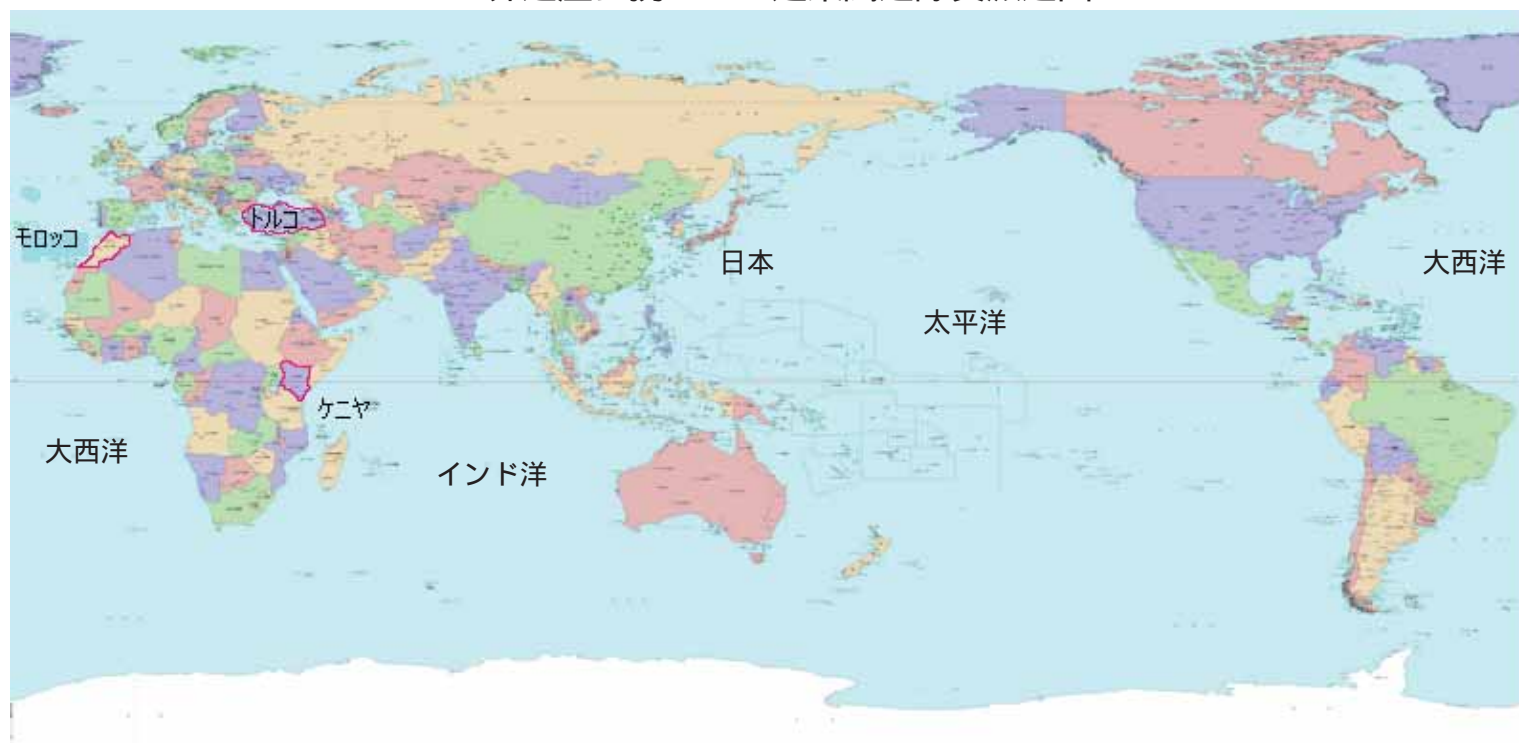
そして、志半ばにして不慮の事故で亡くなったモロッコ・メクネスの故荒樋久雄OBも掲載させていただいた。彼は協力隊参加後もその分野の研究を精力的に続ける中、上智大学に所属し、カンボジア・アンコールワット遺跡の保存修復事業に参画した。

1 建築関連隊員派遣国リスト

アジア				中近東		アフリカ地域				中南米地域				太平洋地域	
中国	3名	モンゴル	2名	モロッコ	54名	ガーナ	25名	ケニア	48名	ホンジュラス	1名	ペルー	4名	サモア	17名
ラオス	14名	ベトナム	1名	チュニジア	1名	コートジボワール	2名	タンザニア	29名	エクアドル	1名	ドミニカ	3名	バヌアツ	1名
フィリッピン	5名	ブータン	7名	イエメン	2名	ジンバブエ	19名	エチオピア	26名	ニカラグア	3名	コロンビア	2名	バプアニューギニア	2名
モルディヴ	3名	ネパール	21名	ジョルダン	4名	ザンビア	18名	リベリア	7名	グアテマラ	1名	パナマ	1名	フィジー	6名
マレーシア	13名	スリランカ	3名			ボツワナ	9名			チリ	1名			ミクロネシア	3名
バングラディシュ	12名					マラウイ	50名								

2004年8月現在

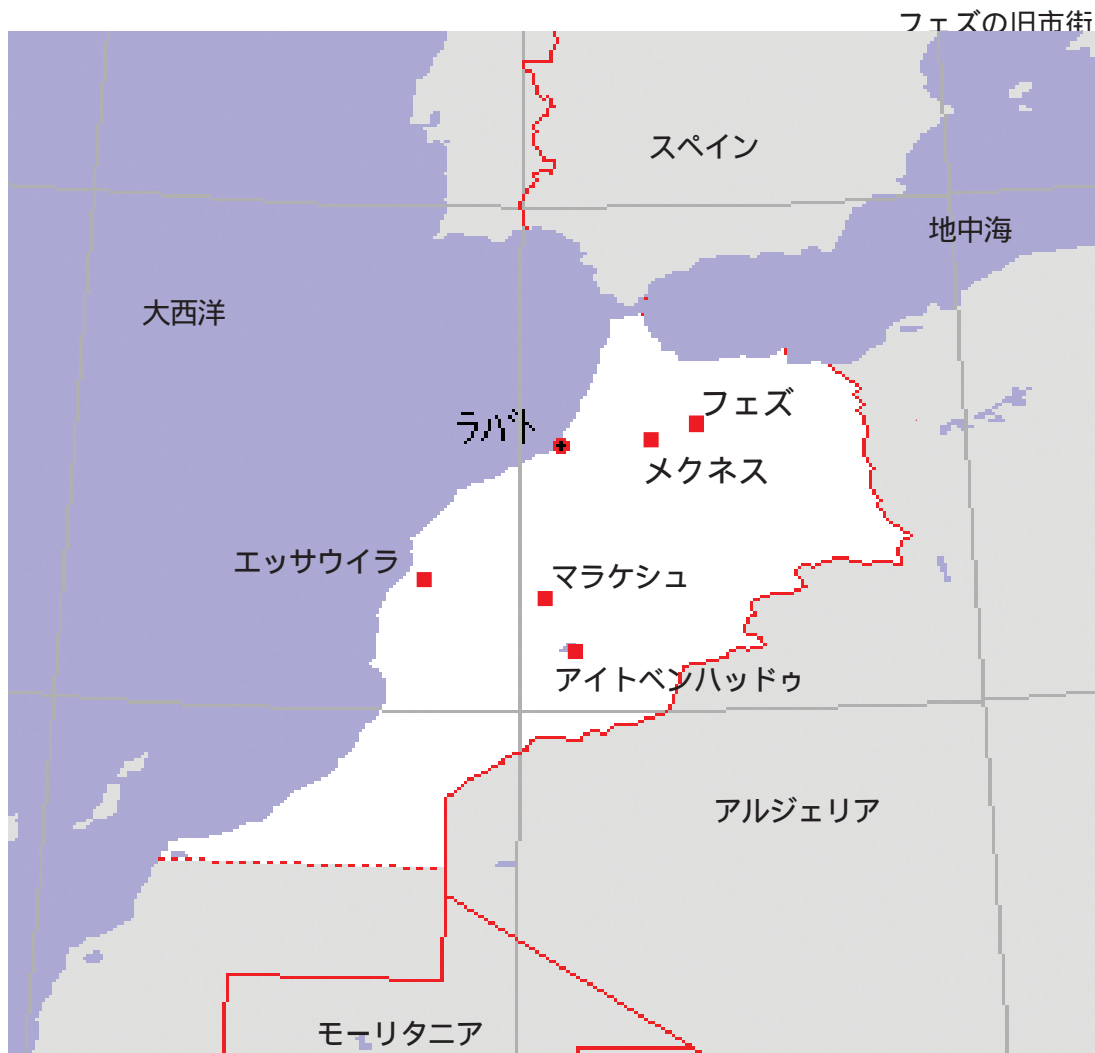
世界遺産に携わった建築関連隊員派遣国





モロッコ王国

Kingdam of Morocco



モロッコの地図

モロッコの世界遺産

フェズの旧市街	隊員が協力活動
マラケシュの旧市街	隊員が協力活動
古都メクネス	隊員が協力活動
アイトベハッドゥとその集落	隊員が協力活動
ヴォリビリスの考古遺跡	
テトアンの旧市街	
エッサウイラの旧市街	隊員が協力活動



ヴォリビリスの考古遺跡



テトアンの旧市街



モロッコの概要

北アフリカで、北はスペイン、東はアルジェリア、南はモーリタニアに囲まれ、地中海の西の出口で、ジブラルタル海峡を挟み大西洋にも面している。

モロッコは先住民ベルベル人が築いた文化と中世にアラブ人が持ち込んだイスラム文化が融合した国である。

現在では中世に築いたイスラム都市が旧市街(メディナ)として今日まで存続している。これが文化遺産として世界遺産となっている。

メディナはどこも迷路状に張り巡らされた狭い道が入り組んでいる。あたかも無秩序な街のように見える。しかしモロッコのメディナは地理的条件やイスラムの法則に従い街が出来ている。

モロッコへの協力隊活動の概要

モロッコへは昭和42年からあらゆる職種で協力隊員が活動している。中でも世界遺産に直接関係する建築関係隊員は昭和60年からである。文化省文化財管理局の各支部に籍を置き、現地建築家と共に建築物の文化財修復保存の計画監理の活動を行っている。実際には各支部のすべての隊員が予定通りの仕事があるのではない。

代々続く隊員も歴史的建造物郡を目の当たりにしながら修復の必要性を感じつつも、予算の都合上、修復は実現しない。そんな中でも隊員が携わったモロッコの世界遺産である建築物を紹介する。



フェズ・エルバリのメディナの全景

フェズ・エルバリのメディナ内は一部を除いて車が入れない迷路状の路地で構成されている。世界銀行の計画では路地を拡張し、ここに車が通れる道路を通す予定。ここでも世界遺産が食べ物にさ、「世界遺産マフィア」なるものの存在をここでも知ることができる。メディナ内の建物は純粋に住みたい人と世界遺産に登録された付加価値を見て裕福な外国人に買われることもある。(＊)

世界遺産登録
登録名

1981年登録
フェズの旧市街
Medina of Fez

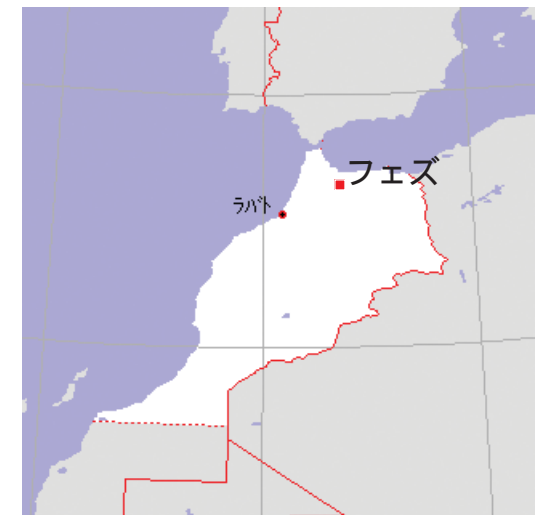
文化遺産の種類(末巻参照)

概要

809年にできたモロッコ最古の立体的迷宮
イスラム都市。カラウィーンモスクを中心
に発展したすり鉢上の都市。

その内部にモロッコ独特のイスラム建築が
無数に存在する。

メディナ(旧市街)の数多くある歴史的建
造物の修復・再生計画等に青年海外協力隊
員が携わった。



「中世の時間」

昭和62年度3次隊（1988～1990）奥津雅和

私の赴任先は、フェズ文化財管理局というところで、活動内容はメディナ（旧市街地）内の歴史的建造物の修復指導でした。

修復計画の作成、現場指示が日常の業務でした。しかし修復現場に行っても作業をしている風景はなかなか見られません。資材があまり届かないのです。届いても作業はすぐに終わります。

フェズのメディナは中世の都市の面影を強く残し、未だに中には自動車が入れません。その為資材はロバの背中に乗せられて現場に来ます。そして届いた分だけ楽しそうに作業をします。技術的には決して高いものではありませんが、急がず慌てず人生を楽しむために仕事をし、生活しています。

中世のまま残っていたのは街の風景だけではなく「時間の流れ」も中世並みでした。街の形が「中世の時間」を今も残していました。

仮にフェズの街が世界遺産に登録されていなかったとしても彼らの仕事のペース、生活のリズムは変わらないだろう。彼らにとってこの街は世界遺産ではなく生活そのものなのだから。必要なら修理し、必要以上には急がず、のんびりと。

フェズでの2年間、「決して裕福ではないかもしれないが、ゆっくりした時間の中で暮らせる豊かさ」を見せつけられた気がします。息せき切らして走り続けなければならない自分、日本を改めて考えさせられました。

帰国してはや15年が過ぎましたが、「中世の時間」が今も当時と変わっていないことを願っています。



平板測量を同僚に教える奥津隊員。



壁面漆喰にモロッコ・アラベスク細工を施す職人



修復中のメデルサ(神学校)にて職人と奥津隊員

フェズの旧市街



フェズ・エルバリのメディナ中心部分

高橋隊員の作成した地図。東西に2 km、南北に1.2 km、世界に誇る立体迷宮都市、数百本に渡る袋小路その中をくまなく歩き、元々の地図の不明点を再調査し、この図面にプロットした。その内容はフェズ・メディナの道路を明確にした。隊員ならでわの成し遂げられる活動であり、また資料的価値も高い。

私は94年6月から約2年半文化省の歴史建造物管理フェズ支局に勤務し、5代目の隊員です。今後も長い間隊員の派遣が継続されるでしょう。

フェズ旧市街は世界一の迷宮都市として知られ、千年以上の歴史を持つイスラムの古都です。保存状態のよいものの一つで、現在も多くの人々が生活する生きた世界遺産です。

生きた歴史都市の常として、フェズ旧市街は保存と住民の生活環境を向上の問題を抱えています。フェズの場合、深刻な問題として富裕層の新市街への流出と貧困層の大量流入です。それと、交通手段の整備、ライフライン等生活環境の改善が急務となっています。

赴任当時、私の職場以外に、保存事業組織として二機関がフェズ旧市街の保存事業に携わっていました。一つは都市計画全般を通してマクロな視点から旧市街の諸問題の解決を目指す機関で、もう一つは歴史建造物の保存修復事業を直接的に統括する機関です。しかし予算、組織規模共に文化省とは比較にならないほどでした。

重要な建造物の保存調査、修復することは観光資源としての価値を高めることと民族の誇りを永遠に失う事があってはならないことです。フェズ旧市街は人類共有の世界遺産で、高度な文明を築いてきたモロッコ人の誇りといったものを、目に見える形で未来にまでつなげていくものに他ならないと私は思っています。



調査現場の住宅で（左から3番目が高橋隊員）

職場には建造物の考証、評価を専門とする考古学員、建築家、製図工が所属し、皆で協力し、調査報告書を作成します。調査書を元に、まれに修復の予算が付き、工事監理も行います。私の職務内容は、調査に参加し、図面完成までの指導をすることでした。

多くの隊員が報告しているように、現地に行けば行うべき明確な仕事を用意されているということはありません。むしろ自分で仕事をつくり、テーマを見つけることです。

そして文化省と先行する2機関との交流のきっかけとしてささやかな前例にでもなれればと思い、いままでの活動を通じて自分が一番必要性を感じたものを自ら作成することを決めました。

作成したのは旧市街のすべての宗教施設、伝統的商業・工業施設、重要な住居等をプロットした地図と建造物の一覧表です。この悉皆調査は現存する複数の同種の元資料をもとに現地で位置と現況を確認して、新たな地図とリストにしました。これにより、旧市街の街路と建物の関係が初めて容易に分かるようになりました。難点として、街路上が建物で覆われているところの実態状況でした。これはフェズ旧市街の中心の実に半分近くの街路がそのような状況で、地図では隠蔽された部分を現地調査に基づいて色分けで明示してやることにより、すべての街路形状と建物の位置関係が把握できるようにしました。その他、公衆浴場とパン焼き屋を新たに追加し、学術的な考察をするための一助にでもなれればと考えたからです。

このような資料はどのような調査研究を始めるにあたっても絶対必用になってきます。特にフェズの場合、何かを行うにしても今までは完全な地図類は存在しませんでした。多くの先行調査で建物の位置がかなりいい加減な場合があるのはこのような事情に基づくものと思われます。

これを作成しようと思ったもう一つのきっかけは、現存する資料相互間にも食い違いが多こと、フェズの世界遺産に必要なとされる正確な資料であることでしょう。資料相互間の食い違いで私の力では解決できなかったことも多くありますが、そのような場合は無理に断定せずに、今回の作業では確認できなかったことを明示しました。

平成3年度3次隊(1992～1994) 近藤昭子



ユネスコの手により
修復された街路



崩壊寸前のメデル
サ・スパイン(調査
現場)

メデルサの装飾

アーチ部分の木製ムカルナス(鐘乳飾り)



ユネスコの協力で行われ
たアディール邸修復現場

フェズのメディナの歴史は804年、かの預言者モハメッドの子孫にあたるムーレイ・イドリス2世によって建設されたことによって始まる。優に1200年以上も前のことだ。歴史とともに増築や改築を重ね、複雑怪奇な迷路状の都市となった今でも生活の場として息づいている。それはフェズのメディナの魅力でもあり、また保存に関わる人間として悩みの種でもあった。

当時の私の調査対象の1つにフォンドウックがあった。実態調査である。フォンドウックとは地方からきた商人の宿で中庭を備え1階は動物置き場、上層階に人間が宿泊する小部屋が配置される。しばしば商取引を行われたこともあり商店としての機能を兼ね備えていた。フェズのメディナに100軒以上あると聞いていたが普通に歩いている限りはそんなにあるようには思えない。用途転換しているのである。商店、物置、作業場に使われているものもあったが大多数は住居として使われていた。同僚によると職を求めてフェズにやってきた地方出身者が住宅費が払えないためこのようなところに住み着くのだという。実際フェズのメディナにはその規模に似合わない程の人口を抱えており、数十万人とも人によっては百万人いるとも言う。フォンドウックの修復にはそうした人たちの住宅政策も視野に入れねばならず、文化省1支局の立場ではどうにも出来なかった。

現在、フェズの代表ともいえるフォンドウック・ネジャリンが修復され木工品に関連した博物館として観光客に開放されている。これに負けず劣らずきれいなフォンドウックがまだ存在するのだ。住民とその生活を守りながらも1つでも多くの施設が遺ってほしいと願う。

平成11年度2次隊 (1999～2001) 佐藤 睦子
フェズ隊員時代

10世紀より、今も30万余りの人が住み、社会・生産活動が続ける世界遺産都市「フェズメディナ」。

壁で囲まれた迷路の都市。3大門の一つブージュルード門の近くに位置する14世紀のイスラム教神学校「マドラサ・ブーイナニア」と当時のイスラム技術が駆使された水時計の修復現場。ここで工事記録をとる事となった。基礎補強工事から始まり、解体中に出てくる歴史の跡。壁をはつと幾層もの左官仕上。つるつる仕上。装飾仕上。荒塗仕上。構造のレンガ積部までいくと、レンガの積み方の違いにより昔の開口部の形跡。後付け現況開口部？記録を辿ると昔の建築の姿が甦る。数世紀に1度行われるか行われなにかの大規模修復現場でしか見る事の出来ない歴史発見。

職人達がフェズの素材を使い伝統施工技術を繰り広げながら下地補強から仕上に移っていく。

レンガ、左官、屋根、木工工事。フェズの砂を使う黄色味を帯びたタドラックという左官仕上は、日本の漆喰と似ている。材料の砂、消石灰、水を合わせ、約1ヶ月発酵させ。仕上は3度塗。塗りごとに仕上厚は薄くなり、最後に、ハンマム(公衆浴場)でよく使われているオリーブの絞り粕から作られたモロッコ石鹸が水に溶かれ、防水として塗られる。左官職人のアリ(名前)が言っていた。昔は、左官下地を均しながら、コーランを唱えた。その壁面が終わると同時にコーランの1節も終わると、神への祈りと共に「仕上にひび割れが生じませんように」という願いも込められていたのだろうか？

現場では、多くの事を職人から学んだ。隊員というより、マドラサ・ブーイナニアの生徒の様だった。

先生は、もちろん職人。強い日射の中、片言のアラビア語で職人達とわいわいコミュニケーションをとりながら、どっぷりフェズに漬かり、土の自然素材の床を歩く自分の足音とひんやりとした温か味ある壁の温度は、今でも忘れない感覚として残っている。

職人の昼ごはん

天井修復工事

左官下地製作中



修復現場のメデルサ・ブーイナニアのミナレットの前



メデルサ・ブーイナニアの修復中

左官材料発酵中

切り取られたアーチ開口部は後付？

装飾出現(修復中)



メデルサ・ブーイナニアの前面道路の反対側

修復現場のメデルサ・ブーイナニアの中庭で職人たちと



佐藤 睦子 シニア隊員として 2003 ~ -2005

再びモロッコ。各地方支局を取り纏めている首都ラバトの文化省遺産局にシニア隊員として配属。ラバトに世界遺産は無かったが、地方支局配属の隊員と共に活動しモロッコ全体の世界遺産保存の運営に携わる。どの配属先も予算・機材不足。おまけに共同作業の苦手な国民性。各職員、性格はとってもいいし、知識や技術も低くない。しかし、なぜか？仕事が上手く回らない。

現地スタッフと遺産修復援助金の申請の為にNGO発足、しかし間際の仲間割れ。90%完成の文化省初の遺産文化観光マップ、あと10%記事を書けば完成なのに書けずに期限切。皆を信じて作業を進め期限を延長してきたのに、悲しく残念な結果に終わる事も度々。しかし、嬉しい事もあった。

4月18日—5月18日は世界遺産月間。大人の問題解決には、子供の頃からのマインドコントロールが大切。表コンセプト「文化遺産保存啓蒙教育」、裏コンセプト「物を大切に扱い、共同作業で一つの事をやり遂げる。」これを機に、地元の子供達と、地元の陶器素材の粘土を使い、地元の歴史遺産の中で、その遺産の模型制作を行う子供のアトリエを企画。場所は、世界遺産に登録申請中のラバトのウダイアのカスバ。遺産保存活動イベント運営技術を身につけてもらいたいという願いを込め、同僚と共に2ヶ月間の準備。当日は多くの同僚、建築大学の学生、日本語を学ぶ学生と隊員がボランティアスタッフで集まってくれた。朝、集合。チームに分かれ、子供達と制作する遺産を見学。そして制作開始。私の頭の中は、スタッフが共同でアトリエを順調に進行出来るか？学校に図工の時間がないモロッコの子供達にどれぐらいの制作能力があるのか？不安で一杯だった。

子供達の集中力と制作能力は高く、見て感じた事をどんどん再現。初日は形作り、一週間の乾燥を経て彩色と2日間に渡りアトリエは大成功。

モロッコの世界遺産は都市遺産。建造物が歴史の面影を残す事と50~100年分ぐらい昔の伝統的経済・生産活動が続く事。都市を構成する殆どの建造物は私的財産で公的な修復援助資金が受けにくい。その中の市民生活や労働環境の改善も必要とされているが、ユネスコ 世界遺産 文化省となると文化援助のイメージが強く援助の優先度が後にまわされがちだ。この都市をこれからも保存していくには、現地の人々自身の理解と協力と努力が一番必要。アトリエに参加してくれたスタッフと子供達が、これからも、それぞれの形で保存活動に携わってくれたらいいと思う。



*モロッコ・イスラム様式
壁面の装飾、材料はタイル・木材・漆喰・塗料・彫金等
巨大建築物は少ないモロッコであるが、幾何学的アラベスクの装飾は想像を超えるバリエーションがあるとともに、修復の技術力が必要となる。*



メデルサ・ブー・イナニアの中庭
床の白大理石はイタリア産



メデルサ・サリジの
中庭、補修が必要

漆喰の貝の装飾
メデルサ・ブー・イナニア

メデルサ・サリジ
早急に修復が必要な建物である
が、修復のめどはない。技術的
に難しい基礎の修復が必要だ。



漆喰のコーランの装飾

漆喰のコーランの装飾
メデルサ・ブー・イナニア



木部梁の装飾が薄れてきた
メデルサ・ブー・イナニア



現在まで隊員が携わった保存修復計画の建造物

- 1 : メデルサ・ブーイナニア(Medersa Bou Inania)
- 2 : メデルサ・メスバヒア(Medersa Mesbahia)
- 3 : カラウィーンモスク周辺施設(Mosquee Karaouiyne)
- 4 : メデルサ・アッタリン(Medersa Attarine)
- 5 : メデルサ・セファーリン(Medersa Seffarine)
- 6 : メデルサ・シェラチン(Medersa Cherratine)
- 7 : フォンドック・ナジャリン(Foundouk Najjarine)
- 8 : メデルサ・サーリジ(Medersa Sahrij)
- 9 : 各フォンドック(Foundouq)
- 10 : フォンテーヌ (Fontaine)
- 11 : 城門・城壁(Bab , Remparts)
- 12 : ほかに歴史的建造物に類するもの



ブー・イナニアの正面にある通り沿いの水時計。
高度な技術を駆使し、水により時刻を街の人に伝えた装置。
1970年代に、イタリア人建築家やユネスコが修復に乗り出したものの詳細が分からず、復元できなかった。

上：20世紀始め、右：20世紀終り
所属先：モロッコ文化省文化財管理局 歴史建造物管理フェズ支局
Ministere des Affaires Culturelles Direction du Patrimoine
Inspection Regional des Monuments Historiques des Fes



マラケシュの旧市街



マラケシュのメディナ中心部 中央の三角形がジェマエルフナ広場

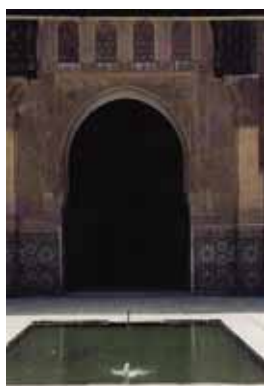
世界遺産登録
登録名

1985 年登録
マラケシュの旧市街
Medina of Marrakesh

文化遺産の種類（末巻参照）

概要

1070年にできたベルベル人のモロッコ王朝最古の平面的迷宮イスラム都市。地形はフェズと対照的で高低差はほとんどない。メディナはベンユセフモスクを中心にでき、現在ではジェマエルフナ広場が観光拠点となり、世界各国から人が集まってくる。ほかに類を見ない空間である。そのメディナにはモロッコ・サルタンを象徴するイスラム建築が無数に存在する。それらの修復・再生計画等に青年海外協力隊員が携わった。



メデルサ・ベンユセフ
の中庭



アグノー門
マラケシュを代表
する城門の一つ



マラケシュの旧市街



このような人垣ができる



モロッコ民族音楽バンド



モロッコ風ファーストフード



傘をさす代筆業



1920年



ジャマ・エル・フナ広場の文化的空間
この広場の大道芸人は
無形世界文化遺産に登録された



広場外周の屋台



音楽隊



水売りのおじさんたち



アクロバットショー

マラケシュの世界遺産（旧市街地）について

平成2年度3次隊（1991～1993） 藤木(紀田)貴子

世界遺産。そんなすばらしいところで、私は仕事をしていたんだと、今更ながら感動する。しかし当時の私は、その様なことを気にするでもなく、マラケシュのメディナ（旧市街地）を歩き回っていた。日本で馴染みのないイスラム建築を、どう扱えば良いのか途方に暮れ、日干しレンガに土を塗った建物を、溜息とともに眺めていた様に思う。だがメディナに通ううちにその装飾のすばらしさ、人々の喧騒と混沌とした街中に存在する秩序に気が付き、次第に魅了された。観光客が訪れる場所は、小奇麗にされているが、メディナ奥の迷路のような路地を歩くと、人々が暮らす昔ながらの住居があり、外面は質素だが、中庭を中心に非常に豊かな表情を持つ。そして調査のためてっぺんまで登った、クトゥピアモスクのミナレット（塔）からメディナを一望した時は、言いようのない感動を味わった。崩れ落ちたエルバディ宮殿での測量では、静寂の中、往時を偲びながら高く青い空を眺め、バヒア宮殿では豪華な装飾に心を奪われた。しかしマラケシュの場合、建物だけでは世界遺産の魅力が半減する。街を生き生きとさせるマラケシュの人達。メディナは人々のパワーがあってこそ、世界遺産としての魅力が存分に発揮され、「生きている」世界遺産になるのである。



職場の中で同僚
と



バヒア宮殿 大中庭



エルバディ宮殿



クトゥピア・モスク
マラケシュの代表的存在
メディナの中心にあり、
代々隊員も修復保存に携
わっている。



エルバディ宮殿



ジェマエルフナ広場を通して
クトゥピアのミナレットを見る夜景



エルバディ宮殿の浴室跡

マラケシュの修復活動

マラケシュは地形の起伏が少ないため、フェズから比べると建物一個の規模が大きい。フェズと比べると、アカデミックな施設は少なく、サルタンの宮殿などのその時代にそくした優雅な歴史的建造物が多い。バヒア宮殿やエルバディ宮殿に代表される通りだ。

その気質のある地で代々の建築隊員は支局長との立場の違いはあるものの同じアーキテクトとして、今後建設的に意味ある歴史的建造物に情熱を注いでもらいたい。



メディナ中心地の路地、幾つにも路地がわかれ、奥が深い迷路状だ。

メディナ中心地のキサリア、幾つもの商店がひしめき合っている。



メナラ離宮の門
離宮と言っても貯水池としての機能を持ち、周りはオリーブ畑である。



メディナのトイレ
イスラム都市には欠かせない公共施設である。



現在まで隊員が携わった保存修復計画の建造物

- 1: メディルサ・ベンユセフ (Medrsa Ben Youssef)
- 2: クッバ・アルモラヴィット (Koubba Almoravide)
- 3: バヒア宮殿 (Palais de la Bahia)
- 4: エルバディ宮殿 (el Badia)
- 5: 工芸館 (Dar si Said)
- 6: メナラ離宮 (Menara)
- 7: サーディン廟 (Tombeaux Saadiens)
- 8: クツビア・モスク (Koutoubia)
- 9: 城壁・各城門 (Remparts, Bab)
- 10:



サード朝の墳墓群
16世紀の時代を象徴するすばらしいモロッコ・イスラム建築である。内部のタイル装飾は目を見張るものがある。



バヒア宮殿
館内のアラベスク装飾は人をもてなすための最高の空間を演出している



所属先：モロッコ文化省文化財管理局 歴史建造物管理マラケシュ支局
Ministere des Affaires Culturelles Direction du Patrimoine
Inspection Regional des Monuments Historiques des Marrakech

古都メクネス



メディナの航空写真 代々隊員の事務所内にある

マンスール門
メクネスの代表的歴史建造物



メデルサ
メクネスのメデルサは木装飾をふんだんに使用した様式で地域性を現している。

世界遺産登録
登録名

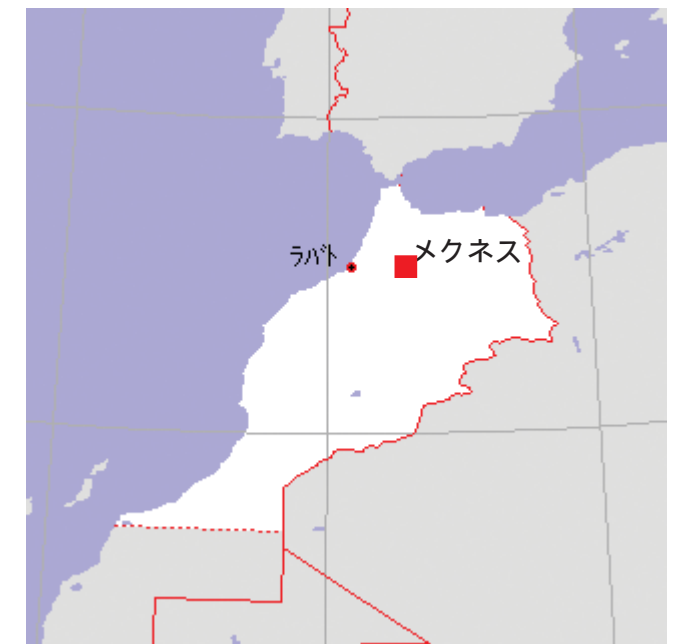
1996 年登録
古都メクネス

Historic City of Meknes

文化遺産の種類（末巻参照）

概要

メクネスは10世紀頃にベルベル人によりブー・フェクラーン川沿いに建設された。その後幾度となく、サルタンにより王朝ができた。なかでも、17世紀のムーレイ・イスMAILの治世に真の絶頂期を迎えた。この時代を代表するのがマンスール門である。この他、隣接する廟やメディナ内のメデルサとうモロッコ独特のイスラム建築が存在する。それらの修復・再生計画等に青年海外協力隊員が携わった。



故 荒 樋 く ん の こ と

山田智子

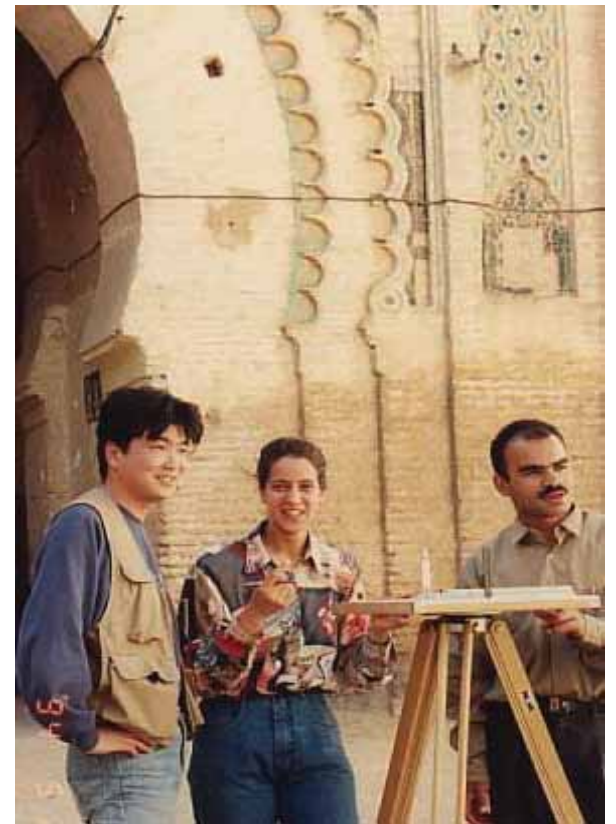
最初に荒樋君と会ったのは1993年の7月。彼が隊員として日本を出発する前のことだ。任地の詳細な情報を知りたいと電話をいただき、私の家の近くにある喫茶店で会った。そのとき、彼の大学院時代の恩師が私の恩師と親しい間柄ということを知り、親近感を覚えた。そして「よくしゃべる人」「フットワークの軽い人」というのが荒樋君の第一印象になった。「沈黙は金」という言葉はモロッコでは通用しない。言葉が少々不自由でも話しかけ、冗談を言い、体を使って自分を表現する人が感じよく思われるので、彼なら大丈夫とほっとした。

2度目に会ったのは、1994年の3月。私が旅行者として任地を再び訪れたときである。私の任期中に作成したマンスール王宮の現状図をもとに、外観パースや修復案など緻密な図面を精力的にこなし、現場にも頻繁に出かけておられた。古都メクネスが世界遺産に登録されたのは1996年だから、その前年までが任期だった彼の時代は、非常に忙しかったであろうと想像する。現地での彼は、第1印象に加えて、良い意味で「周囲を巻き込む人」だった。職場では、隊員のほうから提案しなくてもこなさなければならない仕事は常々あった。しかし、それでは単なる労働力の提供で終わってしまう。彼は、物事に対して日本人としての自分の考えを述べ、常に問題意識を持ち、それを解決するにあたって廻りの人を巻き込みながら行動されていた。そうすることでモロッコ人社会の中で存在価値を発揮されていたように思う。その意味では彼はチャレンジャーであり、協力隊になくてはならない資質をもっておられた。

たとえば、ラバトの考古学学院で日本建築のスライド会をモロッコ人学生に対して行ったり、カウンターパートを日本に派遣しようと日本の受け入れ先を探すのに奔走したり、日本から来る研究者の調査の手助けもしておられた。任期終了後にベルギーの大学の修士課程に進学しようと計画し、局長に履歴書などの書類の書き方をアドバイスしてもらったなど、すっかりしたところもあった。要するに彼は公私とも自分の立場をフルに活用していたのだが、そうすることで結果的に一緒に働くモロッコ人にもよい刺激を与えるものとなっていたのである。

そんな彼だから職場のモロッコ人からは慕われていた。局長は彼の図面の丁寧さと速さに一目置いていた。考古学専門のカウンターパートは彼とほぼ同じ年齢で、よく一緒に行動していたようだ。女性の設計技師や秘書にも愛想よく、面白い人と思われ、職場の全員と家族的なつきあいをしておられた。局長の家のパーティーで、みんなとふざけて踊っている荒樋君の姿を今でもよく覚えている。

任期終了後はベルギーの大学院に所属し、アンコールワットの調査研究に何年も没頭しておられた。去年ついに帰国され、これまでの研究成果を生かすときが来たと思っていた矢先に帰らぬ人となってしまった。なんという運命のいたずらだろう。きっと天国では悔しい思いをされているに違いない。そして彼とお酒を飲みながらモロッコについて語ることができなくなったことが残念でならない。



故荒樋久雄隊員の活動

志半ばにして不慮の事故でこの世を去ってしまった。
歴史的建造物や遺跡にかなり情熱を注いでいた。



隊員終了後、アンコール
ワット遺跡にて活動してい
た故荒樋隊員



モロッコ隊員連絡所
前にて（荒樋隊員は
左端）

隊員活動を通じて

平成2年度3次隊(1991～1993) 山田智子

恥ずかしい話であるが、私は「世界遺産」をモロッコに着任するまで知らなかった。日本がまだ世界遺産条約を批准していなかった1991年夏のことである。考古学を専門とするモロッコ人の同僚が教えてくれたのだが、その口調には歴史的建造物に対する彼の熱い思いがこもっており、私の仕事への期待に身が引き締まる思いがしたものだ。職員が10名ほどの職場は家族的で、ベルギーの大学を卒業した建築家の局長も文化財に対する認識が深く、調査や修復の取り組みに關しての考え方は私のほうが大いに勉強になった。

職場での私の任務は、歴史的建造物を実測して現状図を起し、修復案を立案することであったが、予算がないために実際に修復工事されたものは少ない。調査により傷みの激しい遺構が多いことがわかり、とにかく実測調査による図面化が急がれた。そこで、他の地方の測量隊員に出張を要請して、共同で実測作業にあたることもあった。重い機械を背負い、時間に忠実に黙々と仕事をこなしていく日本人の測量隊員の仕事ぶりは、同僚たちの刺激となったことは言うまでもない。そのおかげで測量隊員が帰った後、カウンターパートの製図技師との作業もスムーズに運ぶことができ、感謝している。



マンスール王宮崩れた北側ファサード 1997年



城壁・門上部の崩れ落ちそうな箇所 1993年

* メディナは城壁に囲まれて出来ているため城壁の修復計画は多い。城壁の中心となる城門は100年位前にフランス人が平面図、立面図等を記録にしている。しかし全てを網羅しているわけでもなく、形状が変更されたり、図面が破れたりして、不明な点も出てきている。メディナの要所を知る上では現状図作成だけでも必要な作業である*



メデルサ・フィラリアは外壁の装飾の大部分が消失しているが、平面プランは当初とほとんど変わっていない。現在は刺繍の学校として活用されている。

マンスール王宮北側ファサード 1992年



城壁・門の下は住民が普段通行 1993年





ベルダイン門

メディナの西側の門、歴史的に重要な位置を占める。そのため、つくりはとても重厚である。



メインストリートの水汲み場



メデルサ近くのメインストリート



ヘリ 穀物倉庫跡

測量隊員の協力を得て記念撮影の一コマ。



材木商店街、メクネスを象徴している

現在まで隊員が携わった保存修復計画の建造物

- 1: マンスール門(Bab Mansour)
- 2: ムーレイ・イスマイル廟(Tombeau de Moulay Ismail)
- 3: ジャメ博物館(Musee Dar Jamai)
- 4: メデルサ・ブーイナニア(Medersa Bou Inania)
- 5: ヘリ(Heri : Greniers de Moulay Ismail)
- 6: キリスト教徒の地下牢(Prison des Chretiens)
- 7: エディム広場(Place el Hedime)
- 8: ベルダイン門周辺(Bab Berdaine)
- 9: マンスール宮殿(Palais et Heri el Mansour)
- 10: メデルサ・フィラリア(Medersa Filalia)
- 11: 水の館(Dar el Ma)
- 12: 城壁・各城門

メデルサ・フィラリアのモスクであった部分は、刺繍の作業場になっている。生徒達は裏表が同じ模様になる複雑なモロッコ刺繍を学んでいる。

メラー（ユダヤ人地区）からメディナへの入口

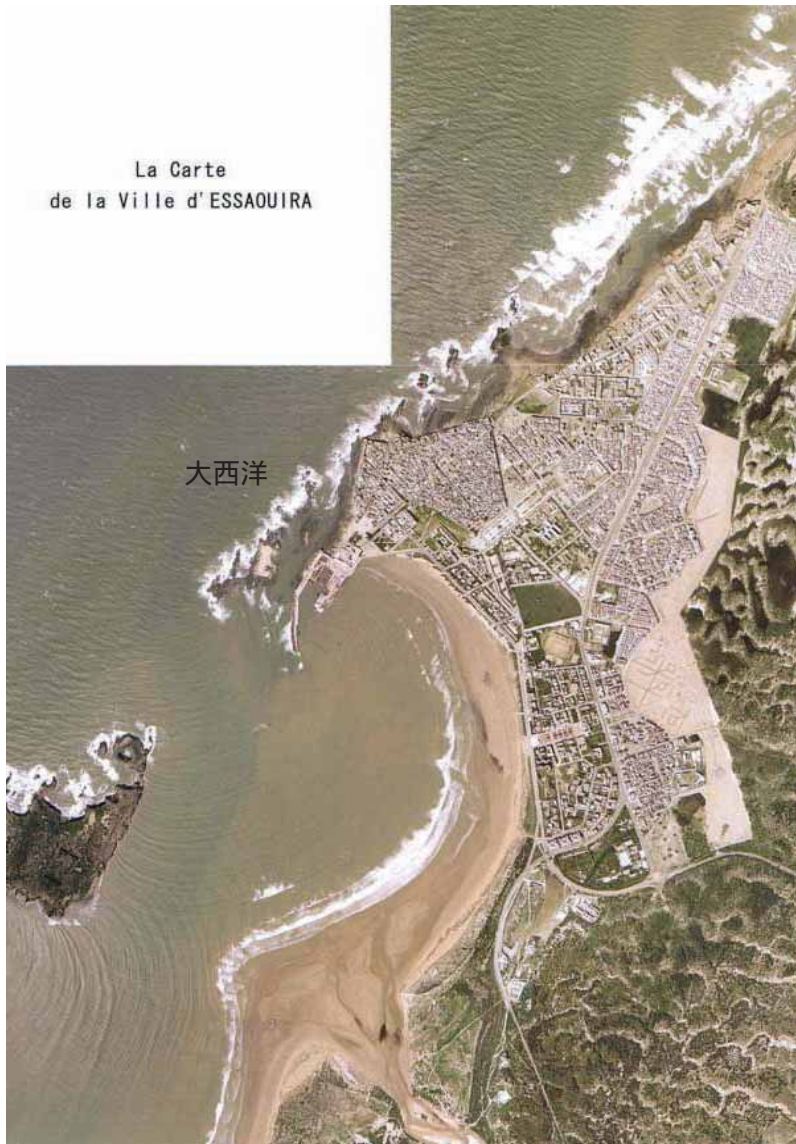


新市街から見るメクネスの遠望



所属先：モロッコ文化省文化財管理局 歴史建造物管理メクネス支局
Ministere des Affaires Culturelles Direction du Patrimoine
Inspection Regional des Monuments Historiques des Meknes

La Carte
de la Ville d'ESSAOUIRA



この島が
モガドール。
この島の
由来。→

エッサウイラの航空写真
大西洋に面した小さな漁師町。

エッサウイラの海岸から
モガドール島を眺める



エッサウイラの旧市街

世界遺産登録
登録名

2002 年登録
エッサウイラの旧市街
Medina of Essauira

文化遺産の種類（末巻参照）

概要

旧モロッコ名 マガドールは島流しの街としてできた。

かつては犯罪者をモガドール島の刑務所に送るためにできたような街だった。今では誰しもが訪ねたくなる街だ。

フェニキア時代からあるこの街はローマ時代、イスラムと続き、ベンユセフモスクを中心にできている。ポルトガルが入植してからメディナはメインストリートがはっきりしたモロッコでは珍しい旧市街だ。海沿いには大砲台や銃穴があり、外圧を意識した建物となった。その内部にモロッコ独特のイスラム建築が無数に存在する。それらの修復・再生計画等に青年海外協力隊員が携わった。



隊員活動を通じて

平成 12 年度 2 次隊 (2000 ~ 2002) 下崎 明久

モロッコ・エッサウイラ県庁 (都市計画部) に初代隊員 (建築家) として活動しました。エッサウイラのメディナ (旧市街) は任期中の 2001 年にユネスコ世界遺産に登録されましたが、メディナ内での活動はほとんど無く、エッサウイラ新市街及び地方都市の公共建設計画に関する設計・概算見積・工事の監理、及び部内 CAD 化への指導などが主な活動内容でした。設計した建物は相当数ありましたが、予算などの関係上、実際工事に至ったものはごく僅かでした。そんななか、半官半民で建設運営するカフェ + ウィンドサーフィンのクラブハウスは設計から工事監理までを通して携わることが出来ました。エッサウイラの海岸にもともとあった公共のクラブハウスを解体して新築する計画で、土地の提供側である県知事とカフェの運営者と私で検討しながら計画したものです。エッサウイラの海岸は、一年を通して強い貿易風が吹く気候を利用してウィンドサーフィンが盛んであり、国内外のサーファーが一年中ここを訪れる重要な観光地として捉えられています。工事は日本と違い基本的に人力によるもので、構造は RC ラーメンの柱・梁にコンクリートブロックを帳壁・スラブとして多用するのが特徴です。仕上はモルタル金ゴテに E P が基本で、壁は白く、窓枠がエッサウイラカラーのマリーンブルーと決まっています。予算的な制約がありシンプルな形態・仕上となりますが、そういったことが景観的に街並みに統一感を与え、魅力あるものとしているように思えます。



* 世界遺産がに登録されると分かれるとメディナの外部に新しい建物が目立つようになる。 それとメディナ内部に外国人が多く住むようになってくる。



ベン・ユセフ・モスク
メッカを向くため入口の石
まで曲がっている

ポルトガルが築いた要壁
現在では観光のため大砲まで
置いてある (上写真)
大砲代下部 (下写真)

メディナの広場
このような広場があるメ
ディナは少ない。



出入口アーチ部分
の下部漆喰の装飾が
細かく施してある。



エッサウイラの旧市街

エッサウイラでは文化省所属隊員は直接この町には携わっていない。



海沿いにはポルトガル入植時にできた守るための施設が海に向かってできている



1900年
エッサウイラの港の門。

百年の隔たり。

1997年



店舗群の並び方もかなり均等化している。色も白い壁と青い扉が独創的な街を作り出している。



メインストリート

道幅が広くて、アーチのアーケードが特徴的なメディナ、ポルトガル入植時にできた部分が多い。メディナ中央の市場なども異質な空間である。



世界遺産と歴史的都市がかかえる問題

歴史的建造物の多いフェズ、生活や観光から出されるゴミの量は計り知れない。

無数にある路地にはいろんな生活がある、宗教施設の周辺に公衆便所もある、商業が盛んなためフォンドック(隊商館)もある、そして観光としての世界遺産、今後、発展するであろう、そして抱えることも多くなるであろう。



無数にある路地は奥深い



路地奥に多くの住宅



メディナの産業保全も重要



フェズ川、ゴミがかなり持ち込まれる



フェズ川中央部、かなりの悪臭



フェズの奥深い路地



宗教施設周辺は水がかなり多く流れる



メデルサ
付属の公衆便所



メディナの
公共施設も重要



街路にある
水汲み場
ゴミもある

アイト・ベン・ハッドゥとその集落



1990年頃のアイトベンハッドゥ この頃崩壊寸前だった集落（西側から撮影）



崩壊寸前の頃、
集落上部から見た風景
（左写真）

東側から撮影



世界遺産登録

1987年登録

登録名

アイトベンハッドゥとその集落

Ksar of Ait Ben Haddou

文化遺産の種類（末巻参照）

概要

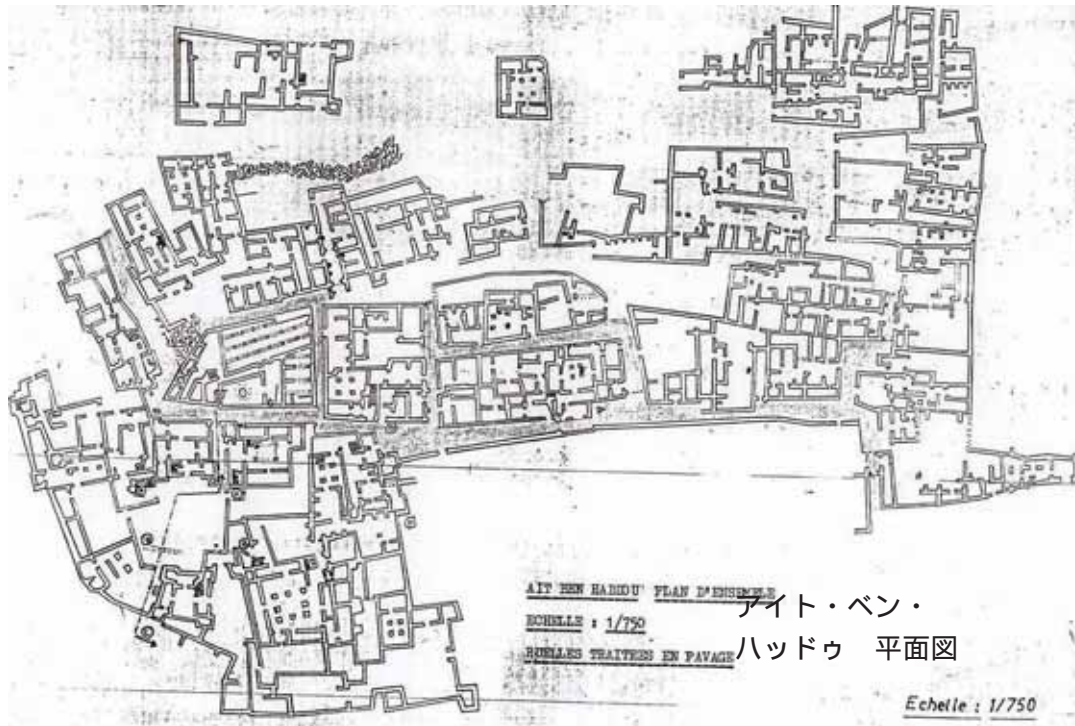
モロッコ内陸部にベルベル人の築いた要塞、アイトベンハッドゥは南モロッコの日干し煉瓦の建築を代表する建物群である。

建築様式はイエメンの要塞の流れを引く。16世紀にサハラを西へ移動してきたイエメンからの移民がこの地に流れ着き、要塞を築いた。

これらの修復・再生計画等に青年海外協力隊員が携わった。



アイト・ベン・ハッドゥとその集落



アイト・ベン・
ハッドゥ 平面図

世界遺産に登録された頃、モロッコ文化省はアトラス地区建築文化財修復保存センターの設立に乗り出した。その頃、現在ある当センター事務所は上の写真のように崩壊した状態のカスバ・タオリットを修復し、そこを新しくセンターとして使用する計画であった。これの修復計画に井石隊員、遠藤隊員、今村隊員も加わり、測量に始まり、図面作成・修復計画をたてた。それと現在、観光コースとなっている部分の修復計画も井石隊員と今村隊員で調査し、図面作成・修復計画をたてた。これらの修復にあたっては国連開発計画(UNDP)の資金援助で行われた。

この周辺のカスバは高低差もあり、複雑な地形をしているため建築隊員での測量は不可能であった。そこでセンター長と共にワルザザット県庁に出向き、知事をお願いして遠藤隊員(県庁派遣の測量隊員)の協力のもと、測量が実現した。

その後、世界遺産であるアイトベンハッドゥの初期測量も遠藤隊員の協力なしでは何も実現しなかった。貴重な助っ人であった。それ以後、南モロッコでの活動は測量隊員は必要となった。



ワルザザット周辺地図



当センターが出来る前の測量をしている時(右端遠藤隊員)
写真の手前は日干し煉瓦を作り、干している状態。

上記写真は100年に一度の大雨により、崩壊してしまったまま放置されていた。日干し煉瓦の素材は土のため、雨対策はいろいろと工夫する必要がある。屋上スラブやパラペットの工夫により、多少は雨を逃がせるようになった。それでも想定外の雨量は対応できない。土壁が崩壊していく。

通常、この地域のカスバは3階から4階建てが多い。壁厚は1階部分で1m前後、スラブはやしの木などを梁に使用し、葦を敷いて土にセメントを混ぜて作っていく。

セメントは高価なため、なかなか多く混ぜることはない。(＊)

アイト・ベン・ハッドゥの集落

平成3年度3次隊（1992～1994）市川達也

自画自賛の活動地

1992年から94年までの2年間、モロッコで、建築隊員として修復活動を行った。この修復活動を通じて世界遺産に携わった経験は、自画自賛に値する。

アトラス山脈の南、Ouarzazate「ワルザザット」市という人口2万人にも満たない小さな街が隊員時代の任地であった。ワルザザットを含む南部モロッコには、カスバ(Kasbah/要塞)あるいはクサル(Ksar/集落)と呼ばれる土の建造物が、半ば崩れかかりながら無数に散在している。

その中の一つ、Ait Ben Haddou「アイト・ベン・ハッドゥ」は、南部に点在する土の建造物の中でも代表的なもので、世界遺産に指定されている。そして、ここを活動現場としていた。

また、市内に残る大規模なカスバの一つ Kasbah Taourirt「カスバ・タオリット」を修復して、職場として使用していた。

こうした生活環境で活動ができたことに感謝したい。そして、世界遺産に携わった喜び、実感は、今でも忘れない。

修復活動

所属先は、文化省の出先機関、亜アトラス、アトラス地区建築文化財修復保存センター(C.E.R.K.A.S)。活動内容は、アイト・ベン・ハッドゥのほかワルザザット周辺に現存する土の建造物の実態調査から始まり、修復のための企画・立案・図面作成、そして工事監理までを担当した。

同僚の大半は、モロッコ人技術者であった。それでも、世界遺産に指定されていることで、ユネスコからの派遣専門家（建築家、都市計画家、考古・社会学者）とともに調査を行うこともしばしばあった。また、短期間であるが、別の任地へ派遣されている関連職種（測量、写真など）の隊員に協力してもらい、チームでの調査業務も行った。

当時は、それでも、UNESCOによる支援もあり、人材、資金の調達もはかどり、他の任地で活動する隊員に比べると、恵まれた現場であったと思う。

活動範囲はさらに広がり、アトラス山中にまで及んだ。構造材料もそれまでの土に石材が加わり、実測調査から修復まで、一段と困難さを増した。

中でも、Sidi-Moussa（シディ・ムサ）と呼ばれる建造物は、穀物倉庫に聖者廟が複合されたものとして、カスバと同様、歴史、文化的価値の高いものである。地上100メートル近い丘の上に位置しているこの実測調査には、別の任地から測量（日吉康雄OB）と建築（笠井いづみOG）隊員に協力してもらい、図面作成、保存の提言書作成までを行った。



ワルザザット近郊のシディムサにて
平板測量を行う市川隊員。面積を広げなければ平板測量は現地
のスタッフでもマスターする。



ワルザザット近郊のシディムサにて
日吉康雄測量隊員、笠井いづみ隊員と現地ス
タッフ

コンクリート調査中

コンクリート

隊員期間中はほとんどの隊員が日本式のコンクリートと西欧式コンクリートの違いを理解できないまま、現地式つまり西欧式のコンクリートを使用している。日本式コンクリートはどこの国でも現地に対して受け入れがたい仕様である。養生、水、碎石、（＊）

アイト・ベン・ハッドゥとその集落

カスバの角の塁壁、塔壁は部族の象徴を表す



アイト・バハの集落

カスバの塔壁、それぞれに特徴がある



アイト・ベン・ハッドゥの外観、装飾が独特

カスバの塔状部分、部族の装飾が分かる



カスバの天井、葦の装飾は塗装してある



カスバの外観装飾、女性の入墨の装飾にも似ている



カスバ・タウリールの集落

カスバの内装、謁見の間



カスバの内装、装飾が細かい

カスバ内の住宅の門、装飾で有力者の家と分かる



カスバの天井、太いものは梁、
梁の上に葦を化粧天井に敷いている



改修前



改修後



床改修中



活動風景



「青春の大地」
撮影スタッフと

カスバでの日本展

修復活動を行いながら、ふと、考えた。世界遺産の存在は、その地を訪れる観光客にとってはこれほど魅力、価値のあるものはない。一方で、そこに住む地元の住民にとっては、生活の一部の環境であるにもかかわらず、管理上の都合から日常の身近な存在から次第にかけ離れていく。そこで、修復した世界遺産の現場を誰よりも地元の人に見てもらいたい、触れてもらいたい、そして存在価値を共有したいと思い立った。

修復後のカスバを会場として、地元住民を対象とした“日本展”を企画、開催したことは、私の修復活動のしめくくりとなった。



隊員作製のみこしにて
カスバ周辺を練り歩く



修復後のカスバを
会場に日本展開催

帰国後の活動

活動中に、協力隊広報ビデオ平成版「青春の大地」の取材と撮影が行われた。

帰国直後から放映が開始され、ビデオの冒頭で“世界遺産の修復に取り組む建築隊員”として紹介された。

このメッセージが、今後建築関連で協力隊を志す人たちへの動機づけになれば、2年間の苦労も報われる。

また、現場で同じ釜のメシを食ったユネスコ専門家との縁で、帰国後、ユネスコのコンサルタントとして、再度、カンボジア・アンコールワットの修復現場に入ることもできた。

協力隊への参加がわが人生の転換期となり、さらに、経験を積み重ね、帰国後10年を越えた現在も、海外の建築分野での開発コンサルタントとして活動している。さらに、あの日本展でのアツイ感動が忘れられず、今後も、国際協力活動を市民社会の中で広く共有、還元していく活動を続けていきたいと思う。そんな協力隊活動の記憶をエネルギーとして、現在、「NPO法人都市計画・建築関連OVの会」の活動へ参加している。(モロッコ 建築 市川達也)



シディ・ムッサ
(Sidi Moussa)
外観、部族の住居及
び食料庫として使用
している。



シディ・ムッサ 入口

現在まで隊員が携わった保存修復計画の建造物

1: アイト・ベン・ハッドゥ (Ait Ben Haddou)

2: タオリット (Kasba Taourirte)

3: シディ・ムッサ (Sidi Moussa)

4: そのほか周辺カスバ

所属先: 亜アトラス・アトラス地区建築文化財修復保存センター

(C.E.R.K.A.S)

カスバ・タオリット

ここにアトラス地区建築文化財修復保存センターがある。

当初は左側の建物しかなく、すべて隊員の実測調査を元に修復された。

現在はカスバ博物館にして一般開放している。

カスバ・
タオリット
の修復前
(川側)

活動風景

アイトベンハッドゥの内部

世界遺産になる前は崩壊部分が多かった。現在では多少修復されている。

シディ・ムッサの
実測状況と遠望

カスバの中庭
ヤギを飼う人もいる

アイトベンハッドゥの遠望

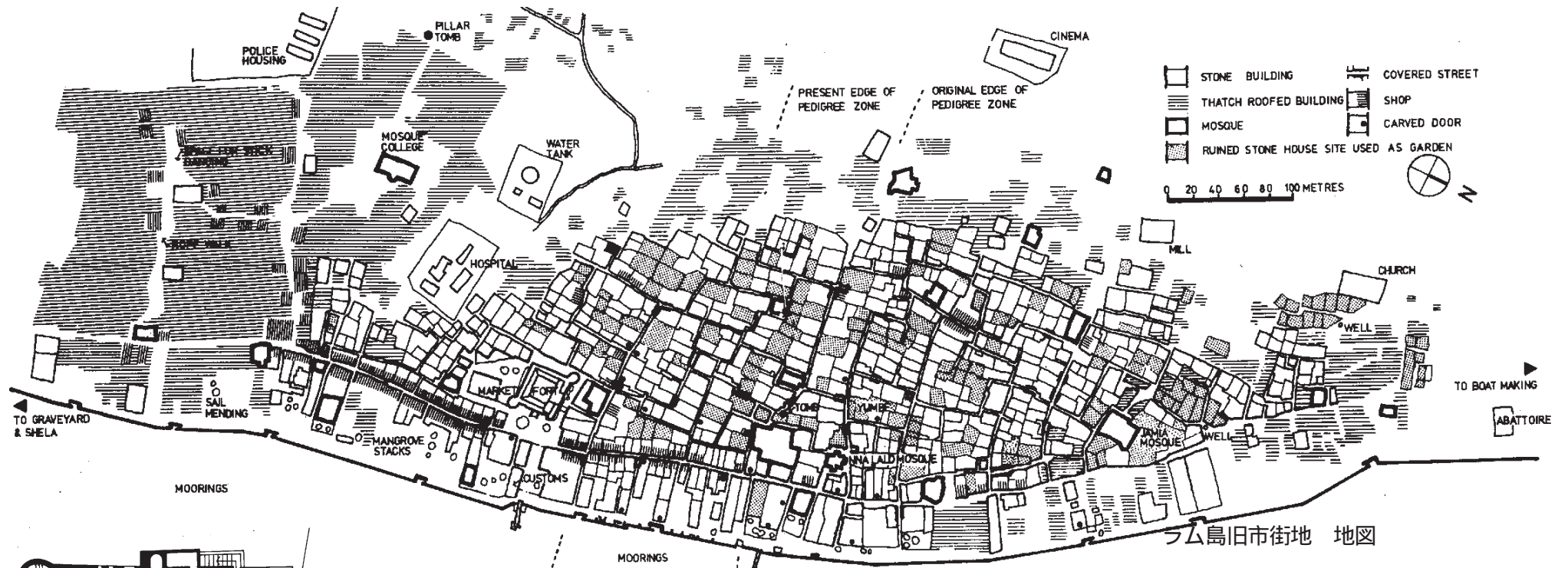




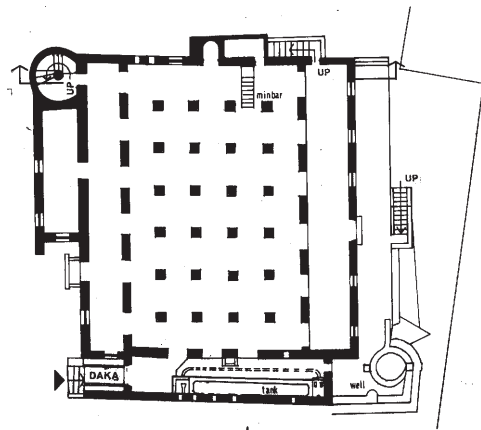
ケニア共和国

Republic of Kenya

ラム旧市街



ラム島旧市街地 地図



SHELA Friday Mosque
平面図と断面図

ラム島旧市街 路地



ラム島旧市街 航空写真

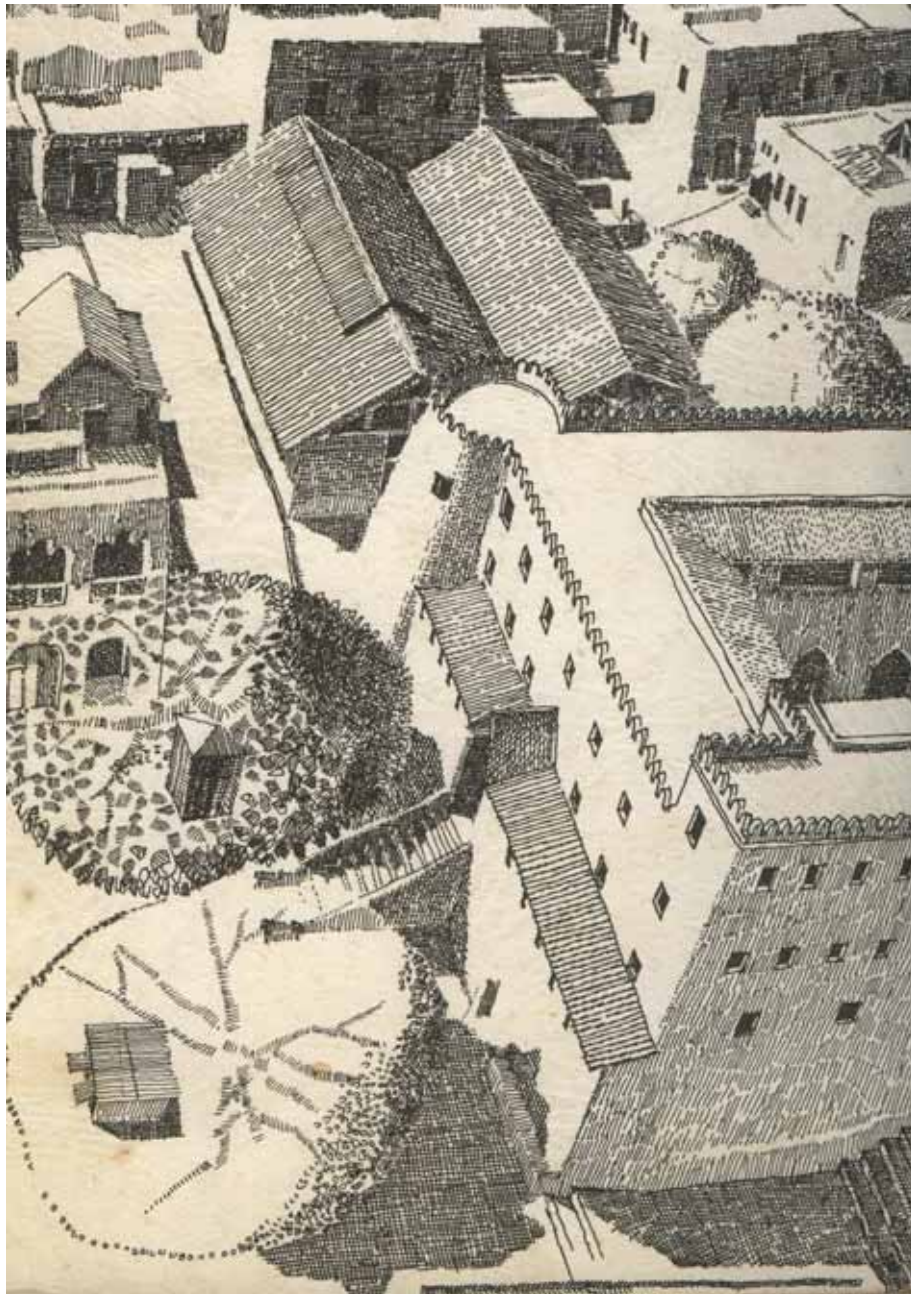


概要

インド洋に面したラム島。 世界の大航海時代にポルトガルがケニアに侵略してきた。 その後アラブ人との戦いに負け、その島一体をイスラムとかした。 その名残が多く残る街である。

町の中心部の旧市街はモスクがあり、イスラム独特の商店が並びナイロビなどとは似つかわない雰囲気である。

ここが世界遺産に登録される以前に、建築の協力隊員がこの街の修復・再生計画等に携わった。



←
サルタンの館



隊員が携わった世界遺産-ケニア国ラム島保存計画-

昭和57年度2次隊（1982-1986）渡辺淳一

82年から2年半程、ケニアの首都ナイロビの建設省本省において、農業研究所やスタッフ向け住宅の設計及び監理業務への協力活動を行っていました。その後、ケニア政府の方針である「地方分権計画」の従い、本省から地方の県事務所への異動の一つとして、私もナイロビ本省からラム県に異動しました。

ラム島には昔有名な刑務所があったので、その当時、私も罪状を認めて、ラム島に異動しますといい、皆の笑いを誘っていました。ラム島は、ソマリア国境に近いインド洋に面した小島にアラブのスルタン（総統）がつくった貿易の街があり、イスラム教が色濃く残る歴史ある美しいところです。この歴史あるラム島の保存にユネスコが3年がかりで調査及び計画を策定しておりました。私は、建設省ラム県事務所での本来協力活動に加えて、その最後の1年間の計画策定に幸いなことに参加することができました。スルタンが住んでいた城跡は、刑務所となり、この計画により、歴史館に衣替えをしようとしていました。その為には、より正確な測量図が必要となり、測量隊員の室正利さんや他の建築隊員の協力を得ながら、ラム島保全計画、特に歴史館の計画策定に協力することができました。

今振り返ると、ラム保存計画は、不十分ながらも住民参加による計画づくりだと思います。世界遺産であるラム島での保存計画策定は、住民参加のプロセスを垣間見せ、私の協力隊隊員生活と活動に新たな視点を案内してくれた貴重な経験だったと思います。感謝。



ラム島の歴史を語る上でダウ船は欠かせない



ラム県立病院（予定）建設現場にて渡辺隊員



左
他の隊員（左から2番目は
室測量隊員）と同僚
右
建設省ラム県建築設計部にて



サルタンの館の屋上、海方向の風景

ラム島の魅力

イスラムの流れを引く都市、要塞を思わせるサルタンの館、路地のある街、建物の密集状態、路地の窓の作り、道の幅、路上の出っ張り、南洋の多種類の植物、モスク、商店、独特の生活スタイル、etc



サルタンの館、脇の路地風景



サルタンの館、中庭の風景



サルタンの館、正面玄関の風景

中心の路地風景



ラム旧市街



一般住宅の玄関
玄関前のベンチが
その家の顔

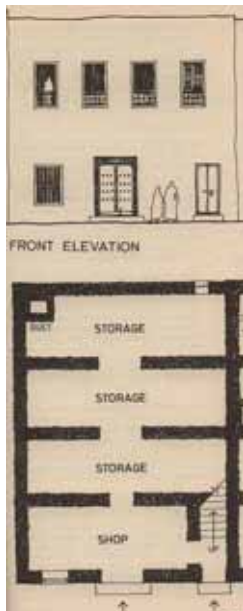
文化財セミナー



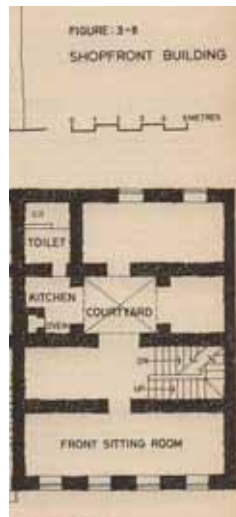
島内の海岸
沿いの民家
のイラスト



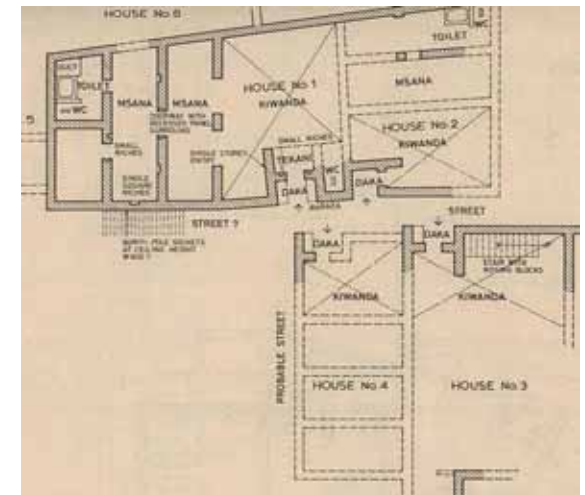
住宅の玄関前、
テーブルと植栽が特徴



島内の店舗平面図、立面図



島内の路地を挟んだ平面図



住宅の玄関前、広い空間が人をもてなす



トルコ共和国

Republic of Turkey

民家保存と観光を始めたサフランボル

サフランボルは伝統的な住宅や街並みが残っている世界的に有名な街である。元来、地方都市の宿場町として繁栄したが、今世紀に入り急速に衰退し、これが街の乱開発を防いだといえる。

街は谷を挟んで谷筋を通る主要道路に沿ってモスク、バザール、ハマームなどの公共施設があり、中心地区を形成している。住宅地はこの中心地区から斜面を登るように広がっている。住宅地内の街路状況はいわばクモの巣状になっている。つまり谷の中心地区に向かって斜面を降りる路地と等高線に沿った路地が巧みに組み合わさり街のパターンが形成されている。

市民の日常生活の中心となる商店街は主要道路の一部で両側に商店や工房が並んでいる程度である。その他、広場に公設の市場を設けてある。

斜面にある住宅はそのほとんどが主な開口部を谷間に向け、視野の広い眺望を確保している。斜面に立つトルコの都市ではこの傾向が多い。

各民家はほとんどが3階建てである。1階が石造、土間で作業場や納屋として利用している。2、3階は住居部分で、大きなお家では十字型のホールになっていて、4隅に部屋がある。もしくはこれを模したところも少なくない。

4隅の部屋では窓のある2辺に低いソファを置き、この部分が出窓となっていることが多い。

世界遺産に登録され、民家保存と観光を地域振興の政策としている。（＊）



上段写真：大邸宅で外観から十字型がうかがえる



サフランボル市街



サフランボルの全景

斜面に住宅が建つ風景がよく分かる



左写真： 中心地で正面の塔はモスクのミナレット。

右写真： 中心地の谷にある商店の一部。

世界遺産登録

登録名

1994 年登録

サフランボル市街

City of Safranbolu

文化遺産の種類（末巻参照）

概要

中央アジアの砂漠の民であったトルコ民族の生活様式を伝えるサフランボルの街はトルコ民家を代表する住居建築として保存されている。東西を結ぶシルクロードの要衝として17世紀に栄えたサフランボルは隊商(キャラバン)のために建設された隊商都市でもある。

旧市街は鍛冶屋、馬具屋、織物職人などが軒を連ね、今もそこに生活する人々のために昔ながらの仕事が生き残った世界遺産都市である。

ここに青年海外協力隊員OBがコンサルタントとして文化無償の技術機材供与に携わった。



トルコ共和国サフランボル市

昭和42年度3次隊（1967～1969）鈴木忠博

隊員時：ケニア、建築設計として派遣

サフランボルは文化無償のコンサルタントとして調査

トルコ共和国サフランボル市には、オスマントルコ時代の貴重な歴史的建造物が多数残されており、1994年にはその伝統的町並み全体がユネスコの世界歴史文化遺産に登録された。サフランボルの木造住宅群はオスマントルコ時代に建設され、1200個の住宅群の内600個が山の麓に600が山の上部とに分かれて建てられており、トルコ有数の観光地となっている。

要請機関であるゾングルダック・カラエルマス大学は住宅群の維持管理のための付属サフランボル職業訓練校を開設時から併設しており、修復学部 of 学生約180名に対し教職員29名体制で木造住宅建築群の修復に携わる技術者の養成を実施している。

このような環境のなか、同訓練校は教育機関としての役割に加え、サフランボル市の要請を受け、その技術力や人材を活用し、伝統的木造家屋の修復や技術的なアドバイスを行っており、現在までに80棟の修復を行ってきた。住宅群は1200棟登録されており、今後修復を必要とする建物が多数残されている。

修復を実施しているゾングルダック・カラエルマス大学付属職業訓練校は建築修復機材の老朽化に伴い実習に支障を来しており、伝統家屋の修復を通して貴重な文化遺産を後世に伝えてゆくという使命を果たし切れていないというのが実情である。

このような状況の下、同校で指導・要請する学生の技術レベル向上、実際に行う修復作業の向上を促進し、伝統的家屋の修復・保存体制を強化するために必要な機材の要請を受けその調査に建築機材の担当として参加した。

担当業務はサフランボル市街並み世界遺産に登録されており、維持管理についての調査であったが、ユネスコの世界歴史文化遺産に登録された施設の保存及び展示に対するトルコ国内での調査である。

- 1) 文化無償資金協力要請項目の緊急度と必要性の確認
- 2) 在来各施設の利用状況
- 3) 機材内容の協議
- 4) 現地工法の調査
- 5) 施設の工事資材の供給量と価格の調査



トルコのサフランボルは山の斜面を利用した住宅群はり、夏は涼しい上層部に住み、冬は暖かい麓に住むという自然を利用した富裕階層の住宅群となっていた。

これらの建物は木造建築の2～3階建てで1階部分は玄関及び納屋となっており、2階は厨房、男女別の居間、トイレ、浴室等があり、3階は寝室等のプライベートな空間となっている。

従って、平屋建てではほとんど見る事が出来ない。

建築構造の特徴としては、1階部分は石積み造、2～3階が木造建築であるが柱と柱の間には筋違いがあり、外壁部分は石積みしあげとなっている。

住宅の中には2階の居間に6m×6m×1.8mの水槽があり、その回りに通路とソファーがあって重要な話し合いの時に使われたとの事である。(写真参照)

この木造住宅群は老朽化が進み、サフランボル市はその維持管理をする技術者の養成をゾングルダック・カラエルマス大学の中に専門学校を設けて進めているが、現在同実習室には木材の裁断、成型、表面処理(鉋仕上げ)に関する機材は総て設置されているが、裁断された木材を羽目板(合決り)、床板(本実)、飾り手摺格子、ドア枠のように二次加工する機材は一台も保有していない。

また、世界遺産となっている木造建築に使用されている木材の耐力を構造的に分析する試験機材や過去に於いて使用されていた塗料を燃焼させ化学的に分析する機材は保有しておらず、分析する際はアンカラ大学に分析を依頼している状況である。

なお、木材の耐力試験及び化学分析機材の操作、保守点検、技術指導者はゾングルダック・カラエルマス大学より派遣されている。



モロッコ文化省派遣の建築隊員について

モロッコ文化省には、同国の各地に存在する歴史的建造物等の保存修復のために、これまでに35名の建築隊員が派遣されています。その始まりは昭和60年度3次隊の3名の隊員派遣に遡ることができますが、これほど多くの建築隊員が継続的に歴史的建造物の保存修復に携わっている国は他に例がありません。

そもそも、文化省に建築隊員が派遣されることになったのは、二国間の文化交流にも尽力された在モロッコ内田園生大使（昭和56年5月～昭和58年12月御在任）が文化情報大臣と会談された際、文化分野における技術協力の可能性について意見交換がなされたことを契機としますが、折しも、モロッコでは、昭和56年にフェズ旧市街が世界遺産に登録され、同国内において文化遺産の保存修復に関心が高まりつつあったとの事情があります。

モロッコには、フェズ、メクネス、マラケシュなど多数の歴史的建造物を有する古都があり、これら古都の旧市街やヴォリピリスの古代遺跡、アトラス山脈南側にあるワルザザット近郊のイト・ベン・ハドゥ（カスバ）が世界遺産に登録されており、首都ラバトの文化本省文化財管理局を含め、建築隊員の配属先所在地となっています。

文化省への建築隊員の派遣が始まる以前、同国には、伝統的に地方公共団体の土木建築部に測量、土木施工、建築等の隊員が多く派遣されていたので、いわゆる一般的なモロッコにおける建築事情に関する情報の蓄積はあったと思います。一方、日本の建築家にとってイスラムの文化や幾何学模様を含む建築様式は馴染みの薄いものであり、特に派遣が始まった頃の隊員はこれらの分野に関する情報も少なく、苦労の連続であったことは想像に難くありません。各配属先の上司や同僚、文献等から知識や情報を得つつ、現場に出て地道な活動を続けて来た訳ですが、このような真摯な取り組みがモロッコ側に評価され、これだけ長期に亘り、多くの隊員の派遣が続いているものと考えます。特に、平成4年、ベナイッサ文化大臣（当時、現在は外務協力大臣）は、文化省配属の建築隊員を文化本省に集めて、活動状況を聞く等隊員の活動への理解と高い評価を示されました。

モロッコ各古都にイスラム文化やモロッコ建築について知見を有する隊員が活動していることは、当時のJICAモロッコ事務所のスタッフにとって、また、日本からの来訪者にとって、貴重な歴史的遺産を視察することができることを含め、モロッコの文化や歴史に触れ、モロッコに関する知識を深める上に大いに参考となりました。隊員派遣初期のエピソードとして、平成63年に柳谷謙介JICA総裁（当時）がメクネス、フェズで隊員の活動を視察された際、隊員による歴史的遺産に関する詳細な説明に感銘を受けられたということがありました。現在も事務所スタッフや日本からの来訪者がこのような恩恵を受けていることと思いますが、元事務所スタッフの一人として、お世話になった隊員の皆さんに感謝の意を表したいと思います。

最後に、文化省配属の建築隊員のOB/OGの皆さんがモロッコでの経験を生かしそれぞれの活動分野で成功されること、また、活動中及び今後派遣される隊員の皆さんが先輩隊員の活動の成果を引き継ぎつつ、各人の目標に向かって有意義な活動を展開されることを期待します。

倉富健治 元モロッコCC（現在：外務省経済協力局無償資金協力課勤務）

注：隊員派遣要請の経緯については畠山敬元調整員（現JICA青年海外協力隊事務局調査役）、初代隊員派遣時期の状況については作永重一元CC（現在フィリピン国日本国大使館セブ領事駐在官事務所長）から話を聞きました。

* モロッコ文化省の建築隊員 *

世界遺産を持つ途上国で、その文化遺産を自国で何とか修復したい国はいっぱいある。しかしその国が建築関連の協力隊を受け入れる国は数少ない。

その理由は「自国の人材で何とかしたい」、「他の国に遺産を持っていかれるようなことは避けたい」、そのように思う国がほとんどである。現在の欧米の博物館には途上国のかなりの文化財があるのは周知の通りである。そしてその文化財が自国に帰ることはない。

実際は途上国の自力での修復や調査は現実には何も進んでいない。仮に日本の学術調査隊が対象国に調査申請を出しても、調査可能の返事が来るのは早くても1年後だったりする。国によっては秘密警察が付け回る事もある。調査中でもこれ以上は自国で行うことを伝え打ち切られることもある。

そして、学術調査を受け入れたとしても、修復計画や予算が付く訳ではない。人が踏み入れたことにより、弊害も生じる。建築的遺跡の場合などは無理して掘り起こすより、掘り起こさない方が確実に保存できる。学術が自分たちのエゴのために利用されることも少なくない。

それを考えるとモロッコ文化省が建築関連の協力隊を受け入れた姿勢には敬意を表したい。（*）

5 携わった隊員系統図 (凡例 氏名 60/3 は昭和 60 年度 3 次隊、02/1 は平成 2 年 1 次隊を示す 派遣隊次 職種 敬称略)

*モロッコ王国 (Kingdom of Morocco)

フ ェ ズ (Medina of Fez)

真壁雄司 60/3 建築 → 奥津雅和 62/3 建築 → 小石沢和子 02/1 建築 → 近藤(外園)昭子 03/3 建築 → 高橋信二 05/3 建築 →
山田絵里 09/1 建築 → 佐藤睦子 11/2 建築 → 十代田泰子 13/2 建築 → 三浦正博 15/3 建築 計 9 名

マ ラ ケ シ ュ (Medina of Marrakech)

涌宗人 60/3 建築 → 湯の口満也 62/3 建築 → 藤木(紀田)貴子 02/3 建築 計 3 名

メ ク ネ ス (Medina of Meknes)

千葉英明 60/3 建築 → 木村一雄 62/3 建築 → 山田智子 02/3 建築 → 荒樋久雄 05/1 建築 → 中村由美 07/1 建築 →
川田勝男 09/3 建築 計 6 名

エ ッ サ ウ イ ラ (Medina of Essauira)

下崎明久 12/2 建築

アイト ベン ハドゥ (Ksar of Ait Ben Haddou)

井石邦義 62/1 建築、今村文明 62/1 建築、遠藤正二 63/1 測量 → 小林正明 01/2 建築 → 笠井(清水)いづみ 02/3 建築 →
市川達也 03/3 建築 → 茶谷澄人 05/2 建築 → 安田治文 09/1 建築 → 二神浩晃 11/3 建築、松本聡 11/2 測量 →
南畝浩二 13/3 測量、小代田隆浩 13/3 建築 → 大原啓 15/3 建築 計 13 名

*ケニア共和国(Republic of Keniya) ラム旧市街 (Lamu Old town) 渡辺淳一 57/2 建築

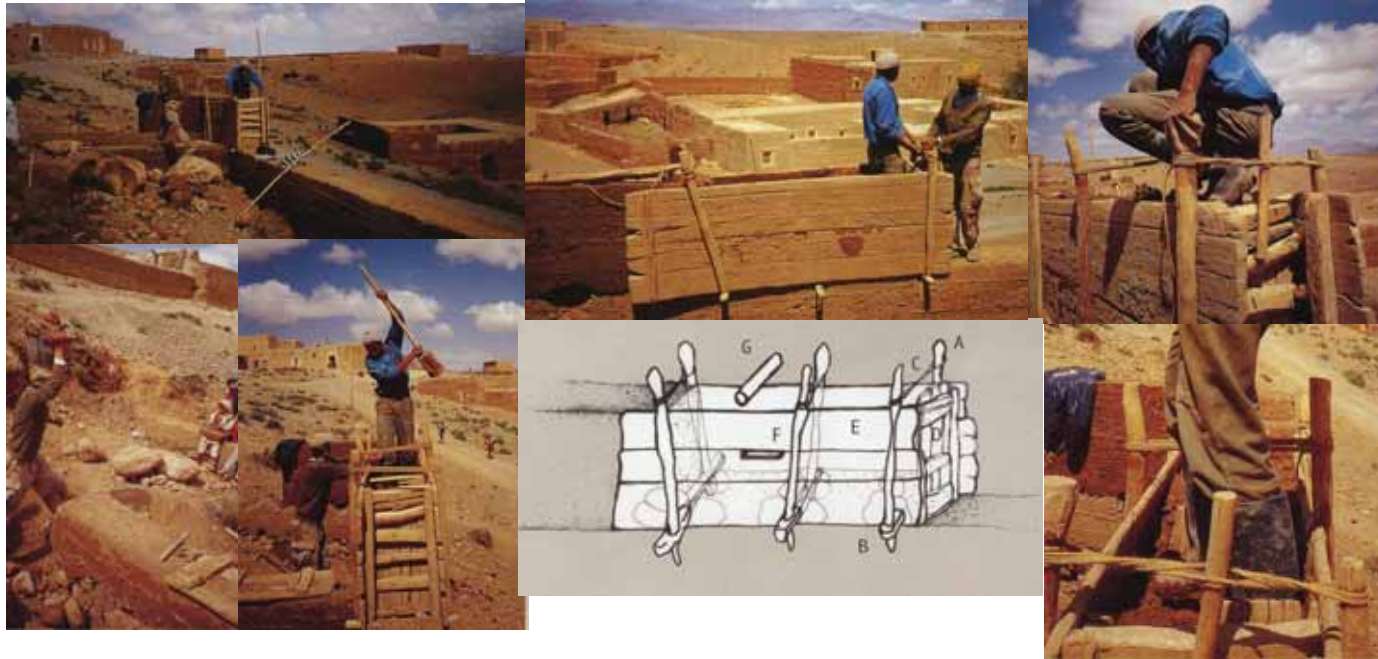
*トルコ共和国(Republic of Turkey) サフランボル (City of Safranbolu) 鈴木忠博 42/3 建築設計

写真撮影者：p 8 奥津、p 10-11 高橋、p 12 佐藤、p 17-18 藤木、p 20 荒樋、p 21-22 山田、p 23-24 (一部) 下崎、P27 文化省カメラマン、
p 29 市川、p 31-32 市川、p 34 渡辺、p 36-38 渡辺、p 40-43 鈴木、p 6・8・13・14・15・16・18・19・22・24・26・28・30・46・48 今村

図版/古写真：p14 右写真(Reperes de la Memoire de Fesより出典)、p15 航空写真(モロッコ国土地理院)、p16 中央写真(Reperes de la Memoire
de Marrakechより出典)、p25(Reperes de la Memoire de Essaouiraより出典)、p35/38 挿絵(LAMU A study in conservationより出典)、
p46 写真上部(Art et Architectures Berberes du Marocより出典)、

モロッコ南部建築の施工手順

Art et Architectures Berberes du Maroc (左写真・図は上記図書より)



アイトベン
ハッドウの現
場にて
型枠を組んだ
様子。
壁厚 1 m 程高
さ 1 m 程



壁を施工する様子を写真と図により解説:図のような型枠を組み、土を打設して乾かして、また隣を同じ様に施工していく。

日本の施工方法から比べると気の長い話である。

城壁(ラバトのシェラ)部分の施工例:城壁下部は上記の写真のように施工し、城壁塔頂部は下写真のように施工していく。建物角部分に石を使用する場合

(写真右から2・3番目) 削り出してモルタルを詰めてはめ込む。



最後に

今回、助成金事業により本冊子発行の最大の機会を与えていただいた公益信託 大成建設自然・歴史環境基金に感謝の意を表したい。青年海外協力隊建築関連職種の地道な活動内容が、広く一般社会にも伝えられ、世界遺産の社会性向上に少しでも寄与できれば、これに優る喜びはない。

また、隊員ＯＶについての資料収集時には、青年海外協力隊事務局の大塚局長および小路調査役には、多大な便宜を図っていただいた。さらに、協力隊を経て調整員、そして外務省職員になられた作永氏、倉富氏、事務局の畠山氏にも、寄稿その他で大変なご協力をいただいた。編集の印刷校正では、(有)ノームプランニングの高村哲氏にも多くのアドバイスをいただいた。最後に、この場をおかりして、皆様に感謝を申し上げる。

2005年10月 「青年海外協力隊員が携わった世界遺産」編集グループ同

参考資料

- 「Art et Architectures Berberes du Maroc」 Salima Naji 著
- 「LAMU A study of the Swahili town」USAM GHAI DAN 著 KENYA LITERATURE BUREAU
- 「LAMU A study in conservation」USAM GHAI DAN 著 KENYA LITERATURE BUREAU
- 「トルコ都市巡礼」陣内秀信・谷水潤編 PROCESS Architecture 93
- 「サフランボルと民家」ジョシュクン安達智英子著
- 「イスラム世界の都市空間」陣内秀信・新井勇治編 法政大学出版局
- 「Reperes de la Memoire FES」Reperes de la Memoire MARRAKECH」Reperes de la Memoire MENES」Reperes de la Memoire ESSAUIRA」
- 「MAROC Les Cites Imperiales」Texte de Samuel Pickens, Photographies de Francoise Peuriot et Philippe Ploquin
- 「迷宮都市モロッコを歩く」今村文明著 NTT 出版

世界遺産の登録基準分類番号(ユネスコの基準)

人類の創造的資質を示す傑作 時代を超え、建築・技術・都市計画および景観の発展に大きな影響を与えたもの 現存の、あるいは消滅した文化的伝統・文明に関する独特な証拠を示すもの 重要な様式の建築物、重要な発展段階を示す景観の見本 ある文化を代表する伝統的集落、土地利用の顕著な見本 普遍的な重要性を持つ事件、現存の伝統・思想・信仰や芸術的、文学的所産に関係するもの。

<編集後記> 編集に携わった人

資料収集 鈴木忠博 保坂公人 松村文雄 市川達也 今村文明
編集構成作業 今村文明

編集にあたり、この冊子は技術報告書でもなく、調査報告書でもない形態である。このような報告書も存在してもいいかと思える。このような冊子の場合、本来は専門の編集者がいて、写真や文章の組み合わせを構成する。素人ながらも試行錯誤しながら製作した。

* 及び(＊)印の文章は編集側のコメントとして付け加えさせて頂きました。



フェズの路地



この幅が路地を決める

フェズの路地
路地そのものが文化財でもあるモロッコのフェズ、誰しものが時代を感じるメディナ、このまちに秘められた魅惑は不思議なものがある。
それが世界遺産としてのフェズ。(＊)



路地で活躍するロバ



フェズの路地



文化財の老朽化



2004年の地震後の建物崩壊

発行日：2005年10月
編集・発行：NPO法人
都市計画・建築関連OVの会
連絡先：〒101-0061
東京都千代田区三崎町3-3-3
TEL 03-3234-3675（事務局）
印刷：東京カラー印刷



回廊の柱頭



路地の水汲み場



メッカを示す路地の出っ張り



文化財の老朽化

修復された文化財

